

複数言語競争のアジア

2005.3

国際日本文化研究センター教授
総合研究大学院大学教授 稲賀繁美

アジアとは、共通語をもたない世界である。シンガポールの日本研究者と学術協力をするならば、作業言語は英語となる。長春^{チャンチュン}で中国社会科学院の日本研究部と会合をもつなら、公用語は中国語となる。韓国の日本研究者とは日本語でやり取りが許されるが、一步その共同体を出てしまえば、韓国語抜きの意味疎通は困難だ。中国や韓国の日本学者で英語に堪能な人材など、指折り数える程度しかない。その両者の橋渡しは日本の果たすべき使命だろうが、それに適う人材など僅少に留まる。日・中・韓の学術交流にも、三言語能力が最低条件となる。だがこれら複数言語に対処可能な人材を育成するという教育的努力に、日本が積極的だったとは到底言いがたい。日本研究という小さな分野ひとつとっても、研究成果報告言語は英・日・中・韓……という選択肢に分岐する。国際学術交流などという美辞麗句は掲げながらも、英語圏と中国語圏との実質的な交流は、皆無に等しいままとなる。

加えて地域研究は、昨今の教育・研究の世界では縮小を余儀なくされている。そうした不景気な学問市場にあって、業績発信にどの言語を選択するかは、ひとりの人間とその家族の一生を左右する。日本語での業績作りの片手間に製造した英語論文程度では、シンガポールや香港の英語圏学問市場で認知されるはずがない。逆に英語や中国語を主要出力媒体に選べば、国内の市場では生存困難となる。日本語業績が国外で評価されて通用するだろう——といった甘い幻想は、捨てたほうが健全だろう。

「複数のアジア」を口で唱えるのは容易だ。だがその可能性と陥穽とを冷徹に見通さねばならない。戦前・戦中期なら、松本重治が英語一本で『上海時代』を書くこともできた。だが、今日ではアジア諸言語に渉る知的情報の確保は、はるかに困難となっている。学術言語における覇権主義にどう対処するか。アジアを論ずる際に無視できない一問題だろう。

(いなが・しげみ／比較文化・文化交流史)